

彙報

二〇一二年度秋期東洋学講座講演要旨

(東洋文庫と本の世界Ⅱ)

第五三二回 一月一九日(月)

判ると愉しい「大清帝国」文献史料

——壇・廟の祭祀で行われた「舞生」の舞が

東洋文庫に蘇る!!

東洋文庫研究員 石橋 崇雄
国士館大学教授

清朝史研究における檔案史料の重要性については改めて言うまでもない。しかし一〇年余り前に言及した檔案第一主義のような傾向が更に進むなか、清朝の文献史料類は難しいという声を耳にすることが多くなり、改めて大きな懸念を覚えている。このたび与えられたこの機会に、「東洋文庫」に収蔵されている清朝のすばらしき「本の世界」の魅力について、その一端なりとも紹介することができた上に、多くの方々に愉しんでいただけたならば、との思いから今回の報告の構成を考えてみた。ところで、ある制度の

内容を知ろうとすると、一般に「建て前」が解るのは編纂史料、「実態」が解るのは檔案史料、と言われることが多い。しかし必ずしもそうとも言えない事例も数多く認められる。ここに取り上げるのは『壇廟祭祀節次』。清朝の祭祀に関わる編纂史料で、国家祭祀としてよく知られている天壇、社稷壇、太廟、文廟などの壇・廟に関わる祭祀の具体的情報を纏めた記録である。

一般によく知られている清朝の官撰史料としては実録類、会典類、則例類がある。この実録については、起居注と諸官庁の記録類とからなり、起居注と同類であると説明されることが多い。しかし清朝の実録を詳細に検証してみると、例えば明朝の実録とはかなり形式が相違しているほか、清代の起居注ともかなり内容が異なることに気付かされる。

またそこには清朝における特異な国家支配構造が反映され、清朝の実録ならではの独特な性格にも溢れている。ところでその清朝の実録には例えば、「辛巳、祈穀於上帝。上親詣行禮。」という記載が毎年の正月に見られる。広くその存在が知られている天壇における「祈穀壇」の祭祀であるが、実録からその詳細な内容を知ることができない。関係する諸官庁に残存する数多くの檔案史料にはその実態が詳細に記載されているものの、当時の関係者にとって自明の事例についてはやはり記載されておらず、枝葉の部分は克

明であるが、大本の幹にあたる内容についてはやはり知ることができない。

もちろんこうした制度の全容については大清会典類や各則例類によってかなり詳細に知ることができる。実際、天壇については『大清会典事例』や『欽定太常寺則例』の記載を検証して「祈穀壇」祭祀の実態に迫ろうとした先行研究もある（石橋丑雄『天壇』山本書店、一九五七年）。確かに『大清會典事例』と『欽定太常寺則例』によって「祈穀壇」における式次第と「樂章」、それに関係者の服装までは知り得る。しかし、その「樂章」の旋律、祭祀における各担当官の「唱」、それに「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」の着衣・帽子・持ち物の色彩、また「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」による舞の実態までは知り得なかった。東洋文庫所蔵の『壇廟祭祀節次』（一帙六冊）はこうした点に関わる情報を今に伝える貴重な記録なのである。

ただ漢合璧の序はあるものの、そこに記年はない。記事内容からみて清朝に樂部が設けられた乾隆七（一七四二）年以降の編纂と考えられるが、詳細は現在用意している拙稿をお待ちいただきたい。全六冊の内訳は、第一冊「壇廟祭祀節次」：祈穀壇／圜丘壇／方澤壇、第二冊「壇廟祭祀節次」：太廟／奉先殿／社稷壇／朝日壇／夕月壇、第三冊「壇廟祭祀節次」：文廟／先蠶壇／帝王廟／太歲壇／天神壇

／地祇壇、第四冊「祭祀穿戴手執」：武舞生帽・衣／文舞生帽・衣／唱禾詞採桑歌人帽・衣／唱禾詞採桑歌時執旗人帽・帶・衣／唱禾詞採桑歌時所飈之五色旗／凡祭祀東西領文生武生班之人所執之節／武舞生所執之千戚／文舞生所執之生籥羽／青衣童子帽・帶・衣／大雩禮領青衣童子之班人所執之節／青衣童子所執之羽、第五冊「文生武生舞譜」、第六冊「青衣童子舞譜」からなる。第一冊から第三冊に所載の「壇廟祭祀節次」が伝える式次第は、漢文と滿洲文とが混在し、清朝の特徴がよく表れている。留意したい点は、祭祀における各担当官による「唱」が滿洲語であった具体的な内容を記していること、「樂章」に旋律が付記されていること、「樂章」の一語ごとにどの舞がどのように重なるのかを詳細に記していること、壇・廟の祭祀ごとに「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」の着衣・帽子・持ち物の形状・文様・色彩が当時のまま克明に伝えられていること、「文舞生」・「武舞生」・「青衣童子」による舞の総てが克明に記載されていることである。こうして今回、清朝における壇・廟の祭祀で行われた「舞生」の舞が東洋文庫に蘇り、世界で初めての連動色彩画面で舞い始めることとなった。

東洋文庫研究部の御協力で蘇った「舞生」の舞は、広く中国の祭祀研究に大きく裨益するものと考ええる。瀧下彩子・原山隆広両氏の御尽力に心からの敬意と謝意を表したい。

第五三三回 一月三〇日(金)

モリソンパンフレットの世界

京都府立大学准教授 岡本 隆 司

現在の財団法人東洋文庫は、「モリソン文庫」と称する欧文を主体とする蔵書を中核に発足した。この蔵書はモリソン (George Ernest Morrison, 1862-1920) という、公的生涯を極東で過ごしたオーストラリア人の蒐集にかかる。かれは一八八五年から一九一二年まで、イギリスの『タイムズ』紙の極東特派員、ついで逝去するまで、中華民国總統府の外国人顧問に任じ、その間に東アジア関係の書籍蒐集につとめ、一大コレクションを築いた。東洋文庫が東洋学で世界有数の蔵書を誇り、かつまた研究のセンターとなりえたのは、この「モリソン文庫」の存在に多くを負っている。

その「モリソン文庫」には、「パンフレット」と称するおよそ七二〇〇件の資料群が含まれている。文字どおりパンフレットというべき、当時単行された小冊子をはじめ、モリソンが内外の当局から入手した文書、切り抜いた新聞記事のスクラップ、あるいは雑誌から抜粋した論文などか

らなるコレクションである。これらはモリソンが蒐集した書籍以上に、同時代における極東の諸問題を実地に表現しており、歴史家・研究者からみれば、「モリソン文庫」の「白眉」というべきものである。

しかしこのモリソンパンフレットは、これまで十分に活用されてきたとはいえない。各々があまりに零細で、資料の整理と目録の作成に時日を要し、関連の文書資料の公開も不十分で、モリソンパンフレットの内容を正確に分析し、その特徴を生かす研究は困難だったのである。

しかし近年、各国の資料公開もすすみ、モリソンパンフレットを包括的・総合的に分析する条件が整ってきた。こうした時機にあたり、われわれは研究会を組織し、モリソンパンフレットの書誌情報をデジタル化し、その活用の利便性を高める作業をすすめるかたわら、その内容を理解するために、モリソンパンフレットを実際に活用した学術研究をおこなった。その結果、モリソンパンフレットは文書資料でも明らかにならない史実をふくむことが確認できた。研究会のそうした成果の一端が、このたび上梓した『モリソンパンフレットの世界』であり、今後モリソンパンフレットを本格的に活用してゆくためのたたき台ともなるう。その内容は、パンフレットの資料的な価値、あるいはそれを蒐集したモリソンその人を考察したものと、パンフレット

の記述を手がかりに、一九世紀中葉から二〇世紀初の中国における社会経済に光をあてたものと大別できる。

そのうち、報告者が執筆した第二章「もう一つの『清韓論』」を紹介したい。この拙論は、モリソンパンフレットに収める一八八〇年代の朝鮮問題にかかわる英字新聞記事の切り抜きをとりあげたものである。その執筆者が誰なのかを考証し、モリソンの書き込みとそれにもとづく目録の記載が誤っている可能性を指摘した。さらにその考察を手がかりとして、当時の清韓関係をみわたし、そこでメディア・ジャーナリズムが果たした役割にも説き及んでいる。しめくくりには、「ロクヒルとモリソンがこの新聞記事を特に切りとつて、残してくれたこと」、「その匿名の執筆者をデニーとみなした、あるいは取り違えてくれたこと」が、以上の考察をもたらしした経緯をふりかえり、そうした面でのモリソンパンフレットの価値を確認する。

第五三四回 一二月三日（月）

中国の族譜と同族結合の実態

東洋文庫研究員 田 仲 一 成

同族の盛衰という視点から、中国の明清時代から民国初期に至る中国近世の社会史を通観する。東洋文庫には、先人の努力により、一〇〇〇種近い同族の系図、すなわち族譜が収集所蔵されている。その大部分は、中国の経済的先進地域である江南三省、つまり江蘇、浙江、安徽に集中しており、これを通して、この地域において同族の果たした役割を追及できる。従来の研究を参考にしながら、この地域の同族結合の実態を総括してみる。

- 1) 江南では、単一或いは少数の同族が村落を構成する、いわゆる同族村落が多い。特に単一の同族から成る単姓村落が多く、この場合は、祖先祭祀を共有する同族集団が郷村組織とも重なることになり、結果として強力な地域支配権を持つことになる。
- 2) 江南同族村落では、明代初期以来、同族が社廟祭祀の組織を独占してきた。
- 3) 江南同族村落では、明代以来の徴税組織である里甲制も、同族が掌握する傾向がみられる。

4) 江南の大同族は、近隣の他の同族との地域的紛争（風水、水利、山林の利をめぐる日常的な争い）を県の裁判で有利に運ぶために、科挙官僚を常に輩出しておく必要がある、科挙受験のための家塾、書院などを経営していた。

5) これらの経費を賄うため、同族は常に同族の共有財産を蓄積する必要性に迫られ、科挙官僚や商人が外部からもたらす利益により、田土の拡張をはかり、これを佃戸に耕作させて、祠産の増強を図った。

以上は、明代までの個別宗族が行った勢力拡張の動きであったが、清代中期に入ると、同姓同士が系図を連結し、遠い世代に共通の始祖を求めることによって、同族の規模をさらに大きくし、県境をこえて広域の同族合同を作るようになる。この傾向の究極に生まれたのが「輩行字」の統一という方法であった。一般に同族は、世代ごとに記号を付け（輩行字）、内部の尊卑長幼の秩序を保ってきた。相互に面識がなくても、輩行字を知れば、自分の輩行字と比べて、どちらが上の世代か、容易に知ることができ、これに年齢を知れば、おのずから尊卑長幼を識別できた。しかし、人口が増えると、狭い地域に集居できなくなり、近隣の他の地域に移住拡散して、時代がたつと、旧居住地の本族とは交渉がなくなり、独自の輩行字を使いだす。それに

よって、輩行字の分裂が起こる。明末清初は輩行字の分裂が激しい時代であった。ところが清代中期に入って、同族が規模の利益を追求するようになると、移住によって一旦分裂した輩行字を分派同士で話し合って、再度統一する動きが出てくる。規模が大きいほど、地域への影響の点でも、科挙における合格者の増加においても有利に働くからである。かくして、清代中期以降、輩行字を統一して規模の拡大をはかる同族が続出する。東洋文庫所蔵の族譜には、一世代一五〇〇名、前後五世代で三五〇〇名に達する同族の例が見いだされる。そのピークは、清代末期から民国初期にかけてであった。ここで次のような変化が起ってくる。

A) 族譜編纂の必要性

宋代以来の族譜は編纂されてきたが、いずれも五〜六世代前の始祖を共有する小規模な同族の系図であったから、ほとんどは手書きの抄本であった。清代に入っても、江南以外の地域では、例えば、ほとんどの村落が同族でできている香港新界の場合を見ても、族譜はすべて抄本である。中には五大姓と称される有力同族の村落があつて、立派な祠堂を持ち、祖先を遡らせて分派を合同しようとする動きもあるが、規模は一〇〇〇人どまりで、族譜も系統性を欠き、印刷される気配はない。これに対して、江南宗

族の場合には、規模が三〇〇〇人から一〇〇〇〇人に達しており、到底、手書きでは用が足りない。結果として、数十巻に及ぶ族譜が数千部も印刷されるようになる。東洋文庫所蔵の巨帙族譜は、すべてこのような同族合同を背景に出来上がったものである。

B) 大宗祠の建設

同族合同によって成員が増えると、統合の象徴として始祖を祀る大宗祠が重要性を増す。ここで多数の分派の合同会議が行われ、盛大な祖先祭祀が挙行される。また天井に近い梁の上には、科挙合格者を顕彰する匾額が掲げられ、宮殿のような壮麗な建築が指向される。

C) 戲台の建設

同族の祖先祭祀は元来、儒教儀礼で行われたが、輩行字の統合により、成員が増大するにつれ、同祖意識が薄れ、郷民同士のような感覚になる。そうになると、厳粛な儒教儀礼は相応しくなくなり、娯楽性の強い演劇が歓迎され、ついに祠堂の中に戲台が作られるようになる。これは江南でも清末以後の現象である。

D) 成員結合の空洞化

ここでは、成員が多すぎて、結束は空洞化する。

これにつれて、組織や財政の実権は上層の大地主や官僚に集中し、独断専行が起こる。空洞化した巨大同族の上に強大な地主官僚権力が成立する。相互扶助的な同族結合は、事実上、崩壊する。

中国近代史をみると、この段階で革命を迎えたことになる。壮麗をきわめた大祠堂が無残に破壊されたのも歴史的必然である。同族結合は、民国初期で機能を停止し、いずれ遅かれ早かれ、終焉する運命にあった。革命はこれに止めを刺したと言える。